吟遊詩人が歌う聖戦の欠片

ふうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吟遊詩人が歌う聖戦の欠片

【Ｎコード】
Ｎ０５６７Ｚ

【作者名】
ふうた

【あらすじ】
聖戦が終結したいつか。とある町のとある酒場。其処で歌われる英雄譚。※この物語はファイアーエムブレム聖戦の系譜の二次創作作品となります。

第一話

？

――神様。

夢を見ているのだ、きっと。

草原、対峙する眼前の者達の姿を見据えながら、イシュタルは静かにこの偶然に心を躍らせていた。

「お姉さまッ！？」

「それじゃあ矢張り彼女が――」

「雷神、イシュタルか！」

ティニーがいる、セリスがいる、アレスが、シャナンが。ああ、ああでも。世界を救う彼らとてただの有象無象でしかない。

イシュタルの視界はただ一人。誰より何より、セティがそこにいた。

「はじめまして、みなさん」

佇む彼はいつか見た姿、脳裏を過ぎるいつかの輝く日々。動揺と、同量の諦観が彼女の胸に去来する。

風神フォルセティに愛された世界最強の風使い。もう、夢でしか会えない大切な想い人。

彼が解放軍に身を置いているという事はこの身を打倒するのだろう。恨みはすまい、自分もまた彼を殺すつもりなのだから。

だから、彼らを迎える礼は典雅に優雅に心を篭める。

「ようこそ、お歴々。お迎えに上がるのが遅れ申し訳ありません、ここよりは――」

「イシュタルは私が止める。セリスたちはユリウスを頼む」

けれど、風の賢者はそれを戯言と切り捨てる。

風と雷の神器使いの一騎打ち。そう表明する風の勇者に、魔王は笑い、盟主は目を見開く。止めようとする青の盟主を止めたのは、同じく神器使いのアレスとシャナン。二人してかぶりを振る姿に、唇を噛み締め、セリスはただ一言「待っている」と告げた。命令にしては弱いその言葉に微かにセティは苦笑いを零すと一つ首肯し。

愉しげに、いびつな笑みを浮かべるユリウスとの会見に場所を移動していく。

「お久し振りね、風の勇者さま。ティニーも。元気そうだったわね？」

流れる風が緑と銀の髪をしか遊びの対象に出来なくなった頃、先に口を開いたのは彼女。街角で出会ったように気易い声。

「君がいて……何故。彼女はあんな目に遭わねばならなかった」

「相変わらずね。ティニーの考えている事の一厘だって分かるようになって？」

「……君に言わせれば、私は朴念仁なんだろうけどね」

「ふふふ、そうね。本当に、そう……」

瞳に指すかげり、唇を一度噛むと彼女は視線を地に落とす。

それでもおどけたように首を傾げる彼女に、森色の瞳に力が篭もる。

怒り、悲しみ、後悔、自嘲、様々な想いを乗せて揺れ、ギリ、と歯軋りが鳴った。

「いつまで、そちらにいるつもりだ」

言葉は無感情に平坦に。隠し切れなかった感情は声を微かに震わせる。

「いつまでも。ユリウス様と共に」

「変わってしまったね、君は……こんな事を、見逃す君では無かったはずだ」

キシリ。

真っ直ぐに見つめてくる翡翠の瞳。

微かな悲しみを乗せたそれにまるで魅了されるように見入っていた事に気づくと慌てて視線をそらす。

「本当にあなたは相変わらず。その目、今も昔も大っ嫌い。その瞳でティニーをたぶらかしたの？　私のように。その声で愛を囁いた？」

キシリ、キシリ。

「その指で愛を確かめた？」

「……イシュタル」

――…ギシッ。

「その胸で――」
「やめるんだッ！」
言葉と心の乖離に体中が悲鳴を挙げるのを確かに耳にしたけれど
「始めましょう？」
いつからか被り始めた仮面はしっかりと微笑んでくれる。
「私とあなた。こうなるのは、元より分かっていた事じゃない」
声音は軽やかに。
「いまさら。これ以上、何を語ると言うの？」
沈黙。
ふと、少女は疑問に思う。
「そうね、最後に一つだけ聞かせて」
「答えられる事ならば」
「なぜ、二人きりに？」
「……君の想像通りだよ」
「――…ッ、だから、朴念仁だというのよセティ」
少女は一抹の寂しさを覗かせて笑う。
「すまない」
セティはゆっくりとした動作でフォルセティを手にする。
「分かっていたのだけれど、ね」
次いでイシュタルも笑みを唇に刻んだまま、神器トール ハンマーを手に取る。

詠唱を吟じてもいないのに二人に静かに存在感が満ちていく。
周囲の大気は異常を感じ取り風が廻り、大地はその異変に梢を盛大に鳴らす。
人ならざる者の血を引く者のみが使役出来る『最強武装』が二つ、全てを断罪する翠の閃風と銀帯びる白の怒槌（いかずち）。二人の纏う魔力は既に伝説の十二聖戦士と同等。今この瞬間にも二人は世界からマナを暴食し、貪り尽くし、凌辱している。自らを殺しかねないその武装を世界は許容出来ず、大気も大地も空も水も全てが暴れ狂う。
アレを止めろと。
周囲の大気は悲鳴を上げ渦巻き、大地は確かに鳴動し快晴だったはずの空は曇天と変わり雨粒を落とし始め――

世界全てが敵と化す。

貪欲に世界から魔力を喰らいながら、しかしその逆に世界から存在ごと抹消せんと干渉をかけられる。
世界とのそんな苛烈な戦いに勝利して初めて神器は扱える。シャナンやアレスにしても、神器の担い手は誰もが多かれ少なかれ経験する。
そうして手に入れた力は、甚大。
世界すら殺せる力を手に向かい合う二人の間に蠢く魔力はすでに人知の外、一瞬の迷いが生死を分かつ。
「馬鹿。本当に、馬鹿」
だというのに。
イシュタルは、見惚れるほどの微笑みを浮かべて相対する風の賢者に声を掛けた。
「自覚しているんだ、あまり言わないでくれ」
セティもそれに当然のように応える。
世界が自分たちを殺そうとする中、二人はそんな抵抗など気にも留めない。

当然だと、イシュタルは思う。
「ありがとう。あなたの前でだけ、私は……一人の女でいられた」
セティも、応える。
「初めて、一人に溺れた」
「「だから」」
期せずして重なる声。
「あなたを」
「君を」
伝えなければ。
「殺すわ」
「止める」
これがきっと、最後の会話なのだから。
たかが世界丸ごと一つ。恥知らずが騒いだからと、言葉を交わさぬ愚などどうして犯せるというのか。
「トール――」
「フォル――」
決意を語った二人にほんの瞬間だけ浮かんだ、ほのかな笑み。
「ハンマーッ！」
「セティッ！」
草原は、光に包まれた。

◇◇◇◇◇◇◇

？

異常は唐突だった。

始まりは誰も気に留めないくらいの小さな渦。
その渦は禍々しさを増して空間を巻きこみ始める。
緩やかに穏やかに。

周囲の景色を歪めるほどの魔力を放ち始めた頃、ようやく解放軍の一人が異常に気づく。
「おい、ありゃ何だ？」
魔力の素養のない兵士が指差した先、渦は二人の形を作り始める。
ざわめく兵士達。
その内の一人が異常を知らせに隊長に知らせに走る。
渦を取り囲むようにして脚を止めた彼らの間、間もなくして草原に降り立ったのは年端も行かぬ少年と少女。
緋色の髪に豪奢な装飾の施された漆黒の服を着込んだ少年と銀色の髪を引き立たせるようにこちらも黒の服を着た少女。
渦が消えると緋色の少年が高らかに告げた。
「我が名はユリウス。解放軍盟主セリスが異父弟なり。兄に逢いに来た。お通し、願おうか？」
超然と周囲を取り巻く解放軍の兵士達を嘲りの意思を込めた視線で少年は睥睨すると口角を持ち上げ笑みを浮かべる。
呆然と彼らを見守っていた兵士たちは最初は呆然と、続いて慄然とした。
「ユリウスッ？」
「あんなガキが？」
「おい、後ろの女。黒衣の銀髪……って」
「雷の魔女、イシュタルかっ！？」
一つ一つが告げていく。
盟主セリスの異父弟ユリウス、伝聞されるトールハンマーの使い手の特徴と後ろの少女の容姿の一致、それぞれが告げている、彼らの仇敵である事を告げている。
いや、そもそもそんな事は瑣末な事。
何より彼らの目の前に在る気配そのものが
――嘘じゃない。

ヒトの退化しきった本能が必死で告げている。

――逃げろ

退化しきっているというのに、その本能の声はあまねく兵士達の頭を大音響で揺らしていた。

――殺される殺される殺されるアレに殺される体が死ぬ心が死ぬ魂が死ぬ存在が死ぬ自分自身が殺される逃げて逃げて死ぬにげんげにげにげ

……逃げろ！

「あ、あああ……？」

生存本能の必死の警告にも関わらず、恐怖に囚われ立ち尽くす兵士たちを尻目に、ユリウスは未だその微笑を崩さぬまま流れるような手つきで呪われし魔道書を開く。

「雑魚が」

狼狽する兵に瞳を細め、放った声はいっそ爽やかだった。ただその裏に紛れも無い殺意と嘲りを込めて。

圧倒的強者。

人間を超越する者との対面。

告げる本能は警鐘をやかましいほど盛大に鳴らす。

「う、ああ……あ、あああぁぁぁぁぁぁっっ！」

そのような恐怖に駆られながら尚、囲いを一気に縮めユリウスの命脈を断たんと剣や槍を繰り出す解放軍の兵士達はやはり歴戦の兵（つわもの）の事だけはあった。

戦場で鍛えた力、技、追い込まれた状況で彼らの肉体は最高のポテンシャルを引き出す。
降り注ぐ何十と言う剣筋の一つですら絶対の勝利の確信を抱くに足る。それほどに彼らの肉体は意思に先だって力を発揮した。
狙うはユリウスの首。
かの少年は動かない。
――殺った！
そう誰もが確信していただけに、次の瞬間に起こった事を理解できた者は解放軍にはいなかった。
「え？」
刃が首を跳ねようかという刹那、闇が走った。
それだけで。
周囲を包囲していた二十人からの兵士の強靭な体躯が両断され、
――トサリ。
草原に散らばり落ちた。
その兵士達全てが生涯を終えて。
未だ死にきっていない心臓が鼓動する度、無駄に全身に血液を回そうと震える度、青い草を濡らていく。
朱に、赤に、緋に、紅に、アカに。
命の素を滂沱の涙の如く惜しみなく。
爽やかな緑駆け抜ける草原に途端に広がる錆びた鉄の匂い。
「く、はは、ははははははっ！　いいぞ、蛆虫ッ、命の残滓を搾り出せ、嘆けっ、懇願しろ！」
中心には闇の皇子。恍惚と闇色を体に纏いながら、命の切れ掛けたヒトの塊を見下ろし哄笑する。
ようやく、彼らは理解する。
人外。
異端。
怪物。
悪魔。

つまり、ユリウスとはそういう存在。
「なっ？！」
何が起こった？
だから誰もが抱いたこの疑問は誰の口にも上らなかった。
肺が機能を放棄する。
声帯が意思とは裏腹に勝手に震え音を発する。
舌は言葉にならない声を形作る。
「う……あぁぁぁぁぁっ！！！？」
あるいは狂気、あるいは錯乱、あるいは絶望。
あらゆる負の感情と強烈な生存本能に促され目の前の少年にと襲い掛かる。
つい先ほどまで帝国軍を蹴散らしていた屈強な兵士達の面影はそこにはない。
「阿呆どもが」
ユリウスは冷めた視線と憫笑で彼らを出迎えた。詠唱するのは暗黒神ロプトウスへの贄に捧げる魔術。傍らに控えるイシュタルが僅かにその端整な顔立ちを苦渋に歪めた。
「消え去れ」
その単語をもって魔術は完成する。
大気に浮かぶ精霊達を貪り食いながら、闇の魔術は姿を現す。命を糧にする暴食の神の、ほんの僅かな残りカスがこの世に顕現した。
「ひぅっ！？」
まず手足がそれに絡め取られた。
「うぁぁっ！？　ひっ、ひゃ、はは、は、なっ、せよ！」
振り解こうともがく。もがく度に徐々に、静かに男たちの腕や腿を飲み込みながら。
闇はついにその牙を剥く。指先が、食われた。
「ひっぎゃっ？　い、ひ……、な、なんだよ、これ」
表皮を破り真皮を喰らい、神経にまで達する闇の牙。
潜り、うねり、絡みつく。

「あ、が……ひ、ぅ……ああ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
神経に絡みつく闇が、唐突に脳に全ての感覚を強制的に伝達させる。
それは身を裂かれるほどの激痛で、
灼いて凍らせ焦がして壊し、
降りる事など出来ぬ快楽すらもたらし、
圧殺され破裂され引き抜かれ喰われ切り刻まれる。
一つ一つが普通ならことごとく即死。
「あ、ぐぎゃ、あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
そんな物を連続的に送り込まれ、屈強な体が跳ね上がる。
神経に絡み付く闇は更に増え、限界までに感じる神経からの錯覚は許容範囲を越えて脳を壊す。
これ以上はこの身が、心が持たないと。脳が全身に告げようとしたその瞬間、
「ああ……う……ふっ、あ、く……ひ、ぬ……ひぬぅ」
気絶の寸前、襲い掛かる闇は一転その力を癒しに変えた。
脳にまで達した闇が、心を強制的に癒していく。
癒されたくなどない、と理性は叫ぶのに。
「ふ、ぁ……が、あ！　あえて、やえて……」
再び襲う、痛覚と快楽。
心が、壊れる。
癒される。
激痛に壊れる。
直す。
快楽に壊れる。
治療する。
精神が壊れる。
修復する。
幾度も幾度も幾度も幾度も幾度も。

殺され尽くした肉体はボロ切れのごとく。
犯され尽くした精神はコマ切れにされて。
稚児のような飽きぬ反復の残酷さは闇の支配者への悦楽の為の生贄。
「くく、くくくっ、はははははっ！　いつ見ても、劣等の足掻く様は笑えるな」
狂笑、闇を外から眺めながら零れ出てくる男たちの懇願に、恍惚と濡れた吐息と共に背筋を震わせる。
「その魂、永久に凍らせてやろう」
唇を舐める舌は紅く。更なる呪文を紡ごうとした刹那――

一陣の、風。

闇を吹き払った風と共に、
「吐き気がするよ。それ以上、手を出すな」
響いた声は凛にして玲瓏。
自らが生み出した旋風に揺れる髪は緑。今は亡き国の民の大きな特徴の一つとされる髪の色。中でも伝説の風使いセティに最も近いと言われているネイブルカラー――最も高貴とされる、深い森の色。同じ色合いの瞳に怒りを滲ませながら。
はたして彼はそこにいた。
――サクリ。
草原を踏み分ける一歩。それだけで幾度も玩ばれ、壊れた兵士達の心は修復を遂げる。立ち直った精神で一歩、また一歩近づいてくる彼を見る瞳に浮かぶ感情は、歓喜。
彼ならば。そう、彼ならば。この理不尽な闇を掃ってくれる。
「セティ様っっ！！」
振り切れた喜びに声が打ち震える。生まれたての動物のような足取りで彼の許へと近寄っていくその数、僅か。ほとんどの兵は少年と少女の周り、一見しただけで命を感じさせない稀薄な存在感で崩

れ落ちている。
そんな中、無事に、何とか無事に、戻ってくる兵士達に仄かな微笑を浮べるとセティは自身の背後を指差した。
「下がるんだ、この二人は私たちが止める」
私たち？
「あ、あれは……ッ！」
「あ、あ…き、きたあああぁぁぁぁッ！」
「セリス様にシャナン様たちだッ！」
兵士たちの疑問は直ぐに氷解した。
気付けば、セティの背後には神の授けたる神器を携えたアレスやシャナン、更には盟主セリスにイザークの双児らそうそうたる勇者たちが駆けつけてきていた。

◇◇◇◇◇

？

――しゃぁぁぁぁぁ。
降り注ぐ豪雨の中。崩れ落ちる音の後には、肉と髪の焦げる独特の臭気。
平原に立つのは、イシュタル。そして、
「誤誘導……いえ、相殺、かしら。いずれにせよ、成長したわね。見違えたわ。止めきれは、しなかったみたいだけれど」
「イシュタルおねえ様」
震える華奢な身体に結んだ銀の髪、その手には母から受け継いだトローンの魔術書。
破壊の女神と対する事でか、それとも目の前で横たわる苦悶の声を上げているセティのせいか、ともかくティニーは恐怖で歯を鳴らしながら自分の姉とも言える人物と向かい合っていた。

「もう、止めて下さい……一緒に戦いましょう？　おねえ様だってどちらが正しいか、分かってらっしゃるでしょう？」
「あれでもね」
　ティニーの言葉をさえぎるようにイシュタルは口を開く。その声色が悲しい事を、瞳の奥の心が泣いている事がティニーには分かってしまう。誰よりも、大切だった姉だから。
「どんなに非道で、冷酷で、どうしようもない人でも、私の母だったの。裏切る訳には、いかないの」
「おねえ様……でも――」
「とりあえず今日はそこのバカな勇者様を引きずってでも連れて帰りなさい。今ならまだ間に合うかもしれない」
　典雅な手付きで指差す先は風使いの青年。その髪の隙間から覗く肌は黒く炭化し、煙を上げている。
「それとも、私とやる？　確かに今の貴女ならそれなりの勝負にはなるかもしれないけれど。その間に間違いなく彼――…死ぬわよ？」
「ッ……は、い……」
「ティニー」
　囁きは歌のように。
　心の篭もった響きを抑揚で誤魔化し、イシュタルは癒しの魔法をかけ始める従妹を見つめた。
「傲慢な言い方で、ごめんなさいね」
　そうしてティニーと、その腕に抱かれるセティへ視線を移す。瞳を閉じて、わずかに言葉を躊躇った。
「――貴女に、彼を託すわ。その人はとてもバカだから、支えてあげて。楽しい事が倍に感じられるように、悲しい事を分かち合えるように」
　微笑は変わらない。声音も変わらず、優しさを感じさせる。
「何でそんな事仰るんですかっ！」
　だから、ティニーは咽喉から零れ出る悲鳴めいた声を抑えられなかった。

紡いだ言葉は命令だった、母代わりの姉として。
託した言葉は懇願だった、だた一人の姉として。
願った言葉は苦痛だった、きっと、恋人として。
雷神と称される彼女は頬を伝う涙を拭いもせず、またそれが凛とした彼女を貶める事もせず、滲んだ視界の先にいる従妹を見つめる。
視線を受けながらティニーは言葉から伝わる痛みに、眉を顰める。

沈黙が、戦場を覆う。

ぽつ、と土砂降りに降り注いでいた雨が小降りになる。

「なんでっ！？　なんで、そんな事を言うんですかっ！！」

その悲鳴は叱責に似ていた
愛する人、愛する姉。
互いが望んでいない戦い。
心を削ぎ落とすような痛みを伴う戦いは第三者であるティニーにも伝わる。
否、誰よりも二人に近しいティニーだからこそ余計伝わるのかもしれない。

「お姉さま、泣いてるじゃないですか。身体も、心も。どうして、そこまでして戦わなきゃいけないんですかっ？」

彼女らしくも無く取り乱して言葉を重ねる。
その様子を微笑み浮かべながらイシュタルは見守り、

「運命だから」

さらりと。言い切った。

その瞳に迷いはない。嘆くことは無い、そんな資格はもう無いからと。

尚も言い募ろうとするティニーに近寄ると顎先に手を添え、頬に唇を寄せた。

「っ？」

頬に触れる柔らかな熱に言葉を失ったティニーと、濡れた肌を重ね体を抱く。

「愛しているわ。貴女も、貴女の好きな男（ひと）も。生き抜きなさい……それだけが今の私の願い」

抱いた腕を解きながら転移の魔法を唱え告げる声音は嘘では有り得ぬ重みを以ってティニーに伝えられる。言いたい事、聞きたい事は山ほどあるのにそれらは全てその重さの前に喉で詰まる。

それでも、

「待って……　一緒に戦いましょうっ？　お姉さまなら――」

「セティをお願い。貴女にしか出来ない事。私には、もう無理なの」

ティニーの悲痛な叫び、聞こえていないはずはないのに、イシュタルはまた微笑を浮かべた。

ただ、今度は仮面を取り払った淋しい微笑みを。

痛々しいほどに、無垢な笑顔。

「幸せにね、ティニー。さっきの言葉、信じてくれなくてもいいけど。私、これでも本当に愛しているのよ、貴女の事」

魔術文字が発動する。少女の姿は掻き消えていく。微笑みと、セ

ティを残して。
鼻の奥が痛む。
セティの頬へ既に止んだ雨とは別に雫が落ちると、それでやっと自分が涙を流している事に気づいた。
両腕でセティを抱きしめながらティニーは目を閉じる。

「おねえ、さまぁ……」

見上げた視線の先、上がった雨の隙間から太陽の光が差し込んでいた。

第一話（後書き）

この小説は以前、作者がとあるサイト様に贈った物を手直しした物です。
ＰＣを買い換え、お気に入りリストを失くしてしまっている内に、恐らくは閉鎖されてしまった様子。
今はもうサイト名も管理人様のお名前も失念してしまいましたが…。
いつかこの小説がその方に届いてくれれば幸いです。

……まあ、その前に完結させなければなりませんね…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0567z/

吟遊詩人が歌う聖戦の欠片

2011年12月2日01時52分発行